

平成 29 年度 文部科学省委託事業  
「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」

教育実習との役割を明確にした「学校インターンシップ」の在り方  
－教育委員会・学校・大学の連携を通して－

沖縄大学

平成 30 年 3 月

## <目 次>

### はじめに

|                                    |    |
|------------------------------------|----|
| 1.本事業の組織体制                         | 1  |
| 1.1.事業組織                           |    |
| 1.2.事業推進委員会                        |    |
| 1.3.教職インターンシップ推進委員会                |    |
| 2.事業の概要と全体のフロー                     | 2  |
| 2.1.事業の概要                          |    |
| 2.2.本事業で開催された会議とその内容について           |    |
| 3.沖縄大学の教員養成の理念について                 | 5  |
| 3.1.教職課程履修の受け入れ方針                  |    |
| 3.2.教育課程の編成と実施の方針                  |    |
| 3.3.教員免許状取得に関する方針                  |    |
| 4.「教職インターンシップ」の実施に関する連携、協働の在り方について | 6  |
| 4.1.沖縄大学の「教職インターンシップ」の在り方          |    |
| 4.2.沖縄大学の「教職インターンシップ」の実際           |    |
| 4.3.学校現場からみる「教職インターンシップ」           |    |
| 4.4.教育委員会からみる「教職インターンシップ」          |    |
| 5.「教職インターンシップ」における学生の力量形成について      | 24 |
| 5.1.「教職インターンシップ」における学生の教師効力感の受容    |    |
| 5.2.「教職インターンシップ実践」における学生の自己評価      |    |
| 5.3.学生の振り返りから見た「教職インターンシップ」の成果     |    |
| 6.「教職インターンシップ」の評価指標について            | 32 |
| 7.「教職インターンシップ」に期待すること              | 36 |
| 8.まとめと課題                           | 39 |



## はじめに

沖縄大学 嘉数健悟（事業実施責任者）

本報告書は、中央教育審議会答申「これからの中学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」（2015）において提案された「学校インターンシップ」の導入について、沖縄大学がこれまで行ってきた教育委員会や学校現場との連携体制の構築による環境整備についての成果と課題をまとめたものです。

沖縄大学では、教師志望学生が大学での講義と直接学校と関わるボランティア実践を通して子どもと学校への理解を深め、実践的指導力の基礎を育む機会を提供することを企図し、2009年度に那覇市教育委員会、2011年度に糸満市教育委員会、南城市教育委員会、豊見城市教育委員会、2012年度に浦添市教育委員会、南風原町教育委員会、八重瀬町教育委員会の5市2町と協定を交わし、「教育ボランティア実践」を授業として設置し、開講してきました。その間、本学は様々な課題を教育委員会、学校現場と共有しながら、2014年度に3市1町教育委員会（那覇市、浦添市、豊見城市、南風原町）との協定内容を見直し、2015年度より「教職インターンシップ」を実施しています（2市1町とは、学生の移動距離や学生の授業時間等への支障などから協定を解消）。

現在、実施している「教職インターンシップ」は、再協定を結んだ4市町教育委員会、学校現場の理解と連携がなければ実施できません。本学の「教職インターンシップ」は、2日間の観察実習を行う「教職入門セミナー」、学習支援を中心とした「教職インターンシップ入門」、担当教員と一緒に共同で授業を実施したり、教科等の教材、教具の協働による作成など、より実践に近い内容を経験する「教職インターンシップ実践」、そして、「教育実習」（教壇実習）と、実習系科目が「授業を観察する」、「学校現場に行く」という「体験」や「ボランティア」だけに終わるのではなく、各実習での課題や内容が次学年度に引き継がれ、系統的に学びを深めていくことを意図しています。そのため、「教職インターンシップ入門」、「教職インターンシップ実践」、「教育実習」を同一学校で行える（少なくとも「教職インターンシップ実践」と「教育実習」に関しては、同一学校に配置する）ようにし、継続的な子どもたちの関わり、継続的な指導が受けられるように依頼しています。これによって、「教育実習」は、指導教員と学生が信頼関係を築いた中で行なえ、学生の成長段階に応じた系統的な指導につながっていると思います。また、同じ学校において「教職インターンシップ」や「教育実習」を行うことで、児童生徒の実態把握がより深くなり、それを踏まえた教材選択や授業実践が可能になります。

このように、本学の「教職インターンシップ」は、教育委員会と学校現場の理解を得ながら協働して取り組んでおります。

最後に、「インターンシップ」は、教職課程を有する多くの大学が方法や内容など、その実施について課題を抱えていると思います。本報告書によって、本学の取り組みが少しでも参考になれば幸いです。



## 1. 本事業の組織体制

### 1.1. 事業組織

代表者及び責任者：沖縄大学 学長 仲地 博  
事業実施責任者：沖縄大学 人文学部 准教授 嘉数健悟  
事務連絡担当者：教職支援センター 事務長代行 池村貴志  
事業実施委員：沖縄大学 人文学部 教授 上地幸市  
                  沖縄大学 人文学部 准教授 吉川麻衣子  
                  沖縄大学 人文学部 講師 天久大輔

### 1.2. 事業推進委員会

#### 目的

事業推進委員会は、学生へのアンケート調査やインタビュー調査、データ収集・分析など、本事業に関する調査研究を実施し、かつ本事業の統括を行う。

#### 委員

沖縄大学 人文学部 教授 上地幸市  
沖縄大学 人文学部 准教授 吉川麻衣子  
沖縄大学 人文学部 准教授 嘉数健悟  
沖縄大学 人文学部 講師 天久大輔  
教職支援センター 事務長代行 池村貴志

### 1.3. 教職インターンシップ推進委員会

#### 目的

教職インターンシップ推進委員会は、「教職インターンシップ」や既存の教育実習の実施に関わる教育委員会や学校、大学との連携・協働の在り方についての取り組みの成果と課題を明らかにするとともに、今後の「教職インターンシップ」の充実・改善について議論する。

#### 委員

那覇市立 松城中学校 校長 相澤敬二  
那覇市立 仲井真中学校 校長 比嘉俊博  
浦添市立 仲西中学校 教頭 仲嶺香代  
那覇市教育委員会 指導主事 池原 鉄  
浦添市教育委員会 指導係長 石川博久  
沖縄大学 人文学部 教授 上地幸市  
沖縄大学 人文学部 准教授 吉川麻衣子  
沖縄大学 人文学部 准教授 嘉数健悟  
沖縄大学 人文学部 講師 天久大輔  
教職支援センター 事務長代行 池村貴志

## 2. 事業の概要と全体のフローについて

### 2.1. 事業の概要（申請書の記載をもとに）

#### （1）事業に関する課題意識

わが国では、1998年の「教育職員免許法」の改正に伴い、「教職に関する科目」の単位数が増加され、様々な大学で1年次から「教職入門」や「観察実習」などの体験型の実習が実施されている。また、中央教育審議会答申「これからの中学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」（2015）においては、「学校インターンシップ」の導入について提案されている。特に、「学校インターンシップ」に関しては、教育職員免許法・同施行規則の改正によって、平成31年度からの教職課程から科目区分が変更され、「学校インターンシップ」の単位を教育実習の単位としての一部読み替えることも可能になった。そこには、「学校インターンシップ」の導入によって、「学校現場をより深く知ることができ、既存の教育実習と相まって、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効である」という意図が読み取れる。

しかしながら、実際に実施されている「学校インターンシップ」や「学校ボランティア」、「観察実習」などの体験型の実習は、学校現場の「体験」や「ボランティア」、「観察」だけに終わっているのが現状であり、既存の教育実習と区別され、実践的指導力の基礎を育成するための実習として有機的に機能しているとは言い難い。つまり、それぞれ実習での課題や内容が次学年度に引き継がれ、系統的に学びを深めていくようなカリキュラムの構成になっていないと考えられる。

一方、実際に学生を受けて入れている学校現場は、学校の教育活動を支援する人材を求めており、その役割の一部を教師志望の学生が担うことで、両者にとって有益な場となっている。また、将来教師を目指す学生であるなら、学校の教育活動の支援や補助業務だけでなく、「本人の実践的指導力に繋がる指導も必要ではないか」、「（大学）2年生、3年生と同じ内容を経験させていいのか」といった声もある。

つまり、「学校インターンシップ」をカリキュラムとして位置付けるには、既存の教育実習と「学校インターンシップ」の役割を明確にしながら、それぞれの実習経験を学習の成果として結びつけ、系統的にカリキュラムを配置する必要がある。

#### （2）事業の目的

本事業では、教育委員会と学校、大学との連携・協働による「学校インターンシップ」導入の課題と成果を整理し、既存の教育実習との役割を明確にしたカリキュラムを提案することを目的とした。具体的には、以下の3点であった。

- ① 「学校インターンシップ」や既存の教育実習の実施に関わる教育委員会や学校、大学との連携・協働の在り方についての取り組みの成果と課題を明らかにする。
- ② 「学校インターンシップ」や既存の教育実習までの継続的な学校現場での経験が学生の「力量」形成にどのような影響を与えるのかを事例的に明らかにする。
- ③ 教育委員会と学校、大学の連携による「学校インターンシップ」と既存の教育実習における学習の内容を明確にし、関連科目のあり方カリキュラムを提案する。

なお、ここからは「学校インターンシップ」を本学において開講されている「教職インターンシップ」として表記する。

### (3) 具体的な調査内容

#### ① 「教職インターンシップ」の実施に関わる連携・協働の在り方について

本学は、図1のような流れによって4市町と連携して「教職インターンシップ」を実施している。これらの取り組みについて、教育委員会の担当者や学校関係者などに対して、インタビュー調査を実施し、これまでの連携の成果と今後の課題を整理する。それによって、これから取り組みを始める大学や教育委員会等の連携のあり方に基礎資料を提供することにつながると考えられる。

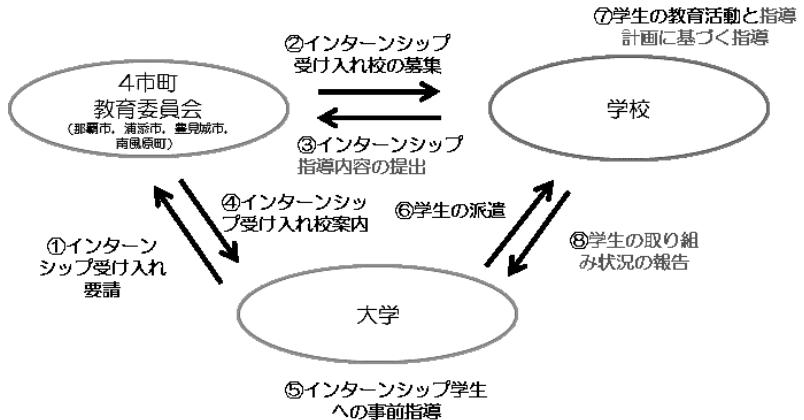


図1 「教職インターンシップ」実施までの流れ

#### ② 「教職インターンシップ」や既存の教育実習までの継続的な学校現場での経験における学生の力量形成について

「教職インターンシップ」や教育実習等の科目における学生の力量形成の実態について質的調査として、参与観察やインタビュー調査を実施し、個別の事例を明らかにする。また、全体の傾向を明らかにするために、「教師効力感」などの尺度を用いて量的調査を行う。以上の量的調査と質的調査により、多角的に調査をすることで、それぞれの実習における学生の力量形成の実態から科目の役割の違いについて検討する。

#### ③ 「教職インターンシップ」と既存の教育実習における学習の内容を明確にしたカリキュラムの提案

①, ②の成果を踏まえて、「教職インターンシップ」と既存の教育実習における学習の内容を明確にしたカリキュラムを提案する。その際、「教職インターンシップ推進委員会」での協議を行ながら、大学と学校現場、学校の3者の連携による環境整備の在り方についても留意しつつカリキュラムを提案する。

### (4) 本事業の成果目標

本事業では、教育委員会と学校、大学との連携によって学校現場のニーズと学生への指導がマッチするようなシステムによって「教職インターンシップ」を実施し、継続的な学校現場での実習経験を有機的に結びつけ、それぞれの実習を明確にする点を最大の成果目標とした。具体的には以下の通りである。

- ① 教育委員会学校、大学の連携体制の構築による「教職インターンシップ」、「教育実習」の在り方について
- ② 継続的な学校現場での実習が学生の力量形成に与える影響
- ③ 地方レベルにおける教職課程の充実、とりわけ実習系科目の充実にむけた方策の提言

## 2.2. 本事業で開催された会議とその内容について

### (1) 事業推進委員会

第1回：2017年7月27日（木）

- ①本事業の進め方について
- ②各人の役割について

第2回：2017年10月31日（火）

- ①教職インターンシップで身に付けさせたい資質能力について
- ②各人の役割の進捗状況
- ③報告書の作成について

第3回：2017年12月15日（金）

- ①教職インターンシップで身に付けさせたい資質能力、評価指標の策定
- ②報告書の作成について

第4回：2017年12月22日（金）

- ①教職インターンシップで身に付けさせたい資質能力、評価指標について
- ②今後の日程について

### (2) 教職インターンシップ推進委員会

第1回：2017年8月4日（金）

- ①本事業の概要の説明
- ②本委員会の役割について
- ③教職インターンシップにおける学生の学びの実態について

第2回：2017年11月10日（金）

- ①沖縄大学の教職課程の理念について
- ②教職インターンシップの在り方について
- ③教職インターンシップで身に付けさせたい資質能力について

第3回：2017年12月26日（火）

- ①教職インターンシップの評価指標について検討
- ②報告書の作成について

第4回：2018年3月12日（月）

- ①本事業の報告書の確認
- ②次年度以降の継続的な取り組みについて

（沖縄大学 嘉数健悟）

### 3. 沖縄大学教員養成の理念について

#### 3.1. 教職課程履修の受け入れ方針

学部段階の教職課程教育では、本学の大学憲章で掲げている「地域共創・未来共創」の大学へという理念に基づく地域の教育を担えるような人材の育成と、一般的に教職者に求められている資質や能力の育成のために、以下のような学生を受け入れます。

- (1) 教育に関心があり、教員になりたいと思っている人。
- (2) 子どもと関わる仕事をしたいと考えている人。
- (3) コミュニケーション能力がある人。
- (4) 自ら課題を見つけ、粘り強く解決していく態度や能力をもっている人。
- (5) 学修生活をする上で必要な基礎的な学力を身につけている人。

#### 3.2. 教育課程の編成と実施の方針

本学の理念の実現と教員免許状の取得及び志望の実現を期して、以下のような方針に基づき教職課程を編成します。

- (1) 各種の教員免許状の取得に対応した必要な教職関係科目を設置して、それらを系統的に学修できるように編成する。
- (2) 教育実習や現場体験的授業科目をコアにした体系的なカリキュラムを用意し、教育現場を理解させると同時に、観察→体験（参加）→実習→振り返りを行わせて実践力をつけさせるようとする。
- (3) 教育諸科学を系統的に学修できるよう学年への配当を考えた教育課程を編成し、子どもの教育と発達に関する理解を深めさせるようにする。
- (4) 模擬授業を重視した教科の指導法の科目を設置し、教科に関する授業実践力を高める。
- (5) 地域、特に沖縄の教育に対する理解を深められるような科目を設置する。

#### 3.3. 教員免許状取得に関わる方針

所定の単位を修めて、教員免許状を取得して教壇に立つとともに、教育の面から「地域共創・未来共創」を担える人材として社会に送り出します。

- (1) 児童・生徒に対する深い愛情と理解力をもち、教科等に関する専門的知識・技能を有する。
- (2) 教員、児童・生徒相互の助け合い、支えあい、共に育ちあう場を大切にするとともに、向上心をもち、生涯にわたって学び続ける意欲と能力を有する。
- (3) 児童・生徒のみならず、様々な年代の人々と広くコミュニケーションを取ることができ、そこで得られた豊かな人間性を背景に他者と協働することができる。
- (4) 地域、特に沖縄県の自然、歴史、文化について関心と深い理解をもち、地域の教育課題に積極的に取り組むことができる。

本学は、近隣地域となる那覇市教育委員会、浦添市教育委員会、豊見城市教育委員会、南風原町教育委員会と連携協働による協定書を交わしており、教職を目指す学生が直接学校現場と関わる機会を設け、教育実習や現場体験的授業科目をコアにした体系的なカリキュラムの構築を行っている。つまり、観察⇒体験⇒実習を通じた積み上げ方式で実践的指導力のある教員の養成を目指し、1年次より体系的に教職課程科目を履修するよう指導している。

（沖縄大学 嘉数健悟）

## 4. 「教職インターンシップ」の実施に関する連携、協働の在り方について

### はじめに

学生の学校現場における実践的な体験は、教師教育において重要な要素の一つである。特に、教育実習のように理論と実践をブリッジしながら学べる場は、学生が個人的な教授能力を開発することに繋がると指摘されている（Darling-Hammond, 2006）。

近年、日本では学生が教育実習以外において、実習を行う科目が設置されており多くの大学で展開されている。特に、中央教育審議会答申「これからの中学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」

(2015) では、「学生が長期間にわたり継続的に学校現場等で体験的な活動を行うことで、学校現場をより深く知ることができ、既存の教育実習と相まって、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効である」ことが指摘されており、「学校インターンシップ」の導入が提示されている。つまり、大学における理論的な学びと学校現場における実践的な学びのつながりを作ることによって、学生の実践的指導力の向上を目指すための取り組みがより求められるようになってくると考えられる。

しかし、このよう体験的な実習系のプログラムに関しては、いくつかの課題も指摘されている。嘉数・岩田（2010）によると、わが国では、1年次から「教職入門」や「観察実習」などの体験型の実習が実施されているがら、それぞれの実習が学校現場「体験」だけに終わっていることを指摘している。また、「ボランティア実践」や「観察実習」、「教育実習」などのような教育実習系の科目は、その内容が系統的に配置されていないとも述べている。

つまり、教育実習系の科目は、それぞれの実習において学生に何を学ばせ、どのような力をつけたいのかを検討しながら、大学の講義での学びと学校現場での学びに系統性を持たせ、そのつながりを考えながら実施する必要があると考えられる。そこで、本章では本学の「教職インターンシップ」がどのような過程を経て実施されるようになり、「教職インターンシップ」でどのような成果と課題があるのかについて述べていくこととする。

### 4.1. 沖縄大学の「教職インターンシップ」の在り方

#### 4.1.1. 沖縄大学の「教職インターンシップ」の過去

##### （1）「学校支援ボランティア」期

2009年4月に本学と那覇市教育委員会は、教職支援センターと各学校間の調整に基づいて学生を派遣する「学校支援ボランティア」に関する協定を結んだ。この協定は、相互に連携し本学の教員養成課程の充実に資するとともに那覇市立学校における豊かな人間性を育む教育活動の支援を目的としていた。この協定によって、本学の教師志望学生が学校現場の教育活動に関わることが可能となり、大学での勉強を妨げない範囲でボランティア活動を行うことになっていた。支援内容は、「教科・領域・総合的な学習の時間等の学習支援」、「特別な支援を必要とする子どもへの学習支援」、「実践的な指導力の養成に関する活動」、「その他、沖縄大学、市教委及び学校長の協議に基づく活動」となっていた。

この時期における実際のボランティア活動の内容は様々であった。例えば、授業中における教師の支援を行っている学生、別室への登校を行っている子どもへの学習支援を行っ

ている学生、放課後に子どもたちの宿題や課題の手伝いをしている学生などがいた。派遣期間については、数ヶ月の学生から半年、半年以上となっており、その活動時間も午前中のみ行う学生、一日中いる学生、放課後の数時間のみの学生など、学生によってバラバラであった。

一方、ボランティアであるが故の課題もあった。例えば、大学の定期試験前における休む学生の増加、大学の休暇期間にあると参加しないなど、学生の任意による参加であったため、「相互に連携し本学の教員養成課程の充実に資するとともに那覇市立学校における豊かな人間性を育む教育活動の支援を目的」とした本来の目的を達成できていない状況にあった。

このように、「学校支援ボランティア」期では、学生が学校現場へ関わる機会ができたものの、学生の意識や内容など多くの課題を有していた。

## (2) 「教育ボランティア実践」期

2011年度から、本学では学生が大学での講義と直接学校と関わるボランティア実践を通して子どもと学校への理解を深め、実践的指導力の基礎を育む機会を提供することを企図し、「教育ボランティア実践」を単位化し、開講することとなった具体的には、2年次から履修可能となる「教育ボランティア実践Ⅰ」と3年次からの「教育ボランティア実践Ⅱ」を科目・単位化し、毎週月曜日の午前中に学校現場に派遣することとした。また、この単位化によって大学における事前事後指導（事前指導4回、中間指導2回、事後指導4回）の充実、学校現場における定期的な学生の学習支援等が可能になった。さらに、大学近隣の市町からの要望もあり、2010年度末に豊見城市教育委員会、糸満市教育委員会、南城市教育委員会、2012年度に南風原町教育委員会、八重瀬町教育委員会、浦添市教育委員会とも協定を変わし、5市2町において「教育ボランティア実践」の科目をスタートした。

「教育ボランティア実践」の開講当初は、その名の通り「ボランティア」としての意味合いが強く、履修した学生から「職員室の片づけをしていた」、「焼却炉の掃除をしていた」、「花壇を耕していた」など、当初の目的であった「子どもと学校への理解を深め、実践的指導力の基礎を育む」ことが出来ていない状況にあった。もちろん、中には「授業の補助に入った」、「朝の会を担当した」、「授業で個別指導を任せられた」など、本来の目的に沿う内容のボランティアを経験している学生もいた。

その背景には、「教育ボランティア実践」が「子どもと学校への理解を深め、実践的指導力の基礎を育む」ための科目とは言いながらも、それは建前で内容を各学校に丸投げしているという状況があった。また、一部の学生は、2年連続で同じ内容を経験するという事態も起きていた（その中の多くの学生は、校内の清掃、花壇整理など生徒と関わることがないまま、学校現場での実習を行っていた）。

そのため、学生が大学での講義と学校において体験的な学びを深める中で、子どもと学校への理解を深め、実践的指導力の基礎を育むことを目指すのであれば、教育実習系の科目を軸にして系統的にカリキュラムを考え、それぞれの実習での経験や学びが繋がるような内容を考えることが必要ではないかという議論が出た。

表1は、2011年度から2014年度までの本学の教育実習系科目とその内容を示したものである。

**表 1 2011 年度から 2014 年度までの沖縄大学の教育実習系科目**

| 教育実習系科目（履修年次）    | 科目の内容  |
|------------------|--|
| 教職入門セミナー（2年次前期）  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校現場での二日間観察実習</li> <li>・一日の教師の仕事を観察する</li> <li>・教わる側から教える側への視点の変換</li> </ul>             |
| 教育ボランティア実践Ⅰ（2年次） | <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎週月曜日の午前中に協定を結んでいる 4 市町の小中学校でボランティア実践を行う</li> <li>・年間を通して、45 時間以上のボランティア実践を行う</li> </ul> |
| 教育ボランティア実践Ⅱ（3年次） |  |
| 教育実習（4年次）        | <ul style="list-style-type: none"> <li>・中学校は 3 週間、小学校は 5 週間の教壇実習で母校自習を原則としている</li> </ul>   |

表 1 からも明らかなように、「教育ボランティア実践」は、同じ内容となっており、明確な意図をもって実施されていたとは言い難い。

#### 4.1.2. 沖縄大学の「教職インターンシップ」の現在

#### ～「ボランティア」から「インターンシップ」へ～

これまでの課題を踏まえ、本学は、2014 年に 5 市 2 町の教育委員会との協定を見直し、新たな協定書のもと 3 市 1 町（那覇市、浦添市、豊見城市、南風原町）と再協定を交わした。新たな協定書では、「支援内容」としてものを「連携協働内容」とし、「インターンシップ入門及び実践、観察実習、教育実習の受け入れに関すること」、「生徒指導等の調査研究に関するここと」、「学生及び現職教員の実践的指導力の養成に関するここと」が新たな内容として追加された。それによって、本学では 2015 年度より「教育ボランティア実践Ⅰ」を「教職インターンシップ入門」、「教育ボランティア実践Ⅱ」を「教職インターンシップ実践」として名称を変更し、これまでの「ボランティア」から、学生の教師としての力量形成を目指した「インターンシップ」としてその内容の充実が図られるようにした（表 2）。

具体的には、「教職インターンシップ入門」は、教師という視点で学校現場に継続的に関わることによって、児童生徒あるいは集団に対する指導方法、教師の仕事の意義や難しさを自らの体験を通して学ぶことを目的とした。また、「教職インターンシップ実践」は、各教科等の授業への指導補助として関わる中で授業力の向上に係る指導スキルを学ぶこと、学校課題への対応の仕方や学級経営のあり方、児童生徒等との関係性の高め方を体験的に学ぶことを目的とした。

本学の教育実習系科目は、2015 年度以降から実施の方法も変更した。まず、2 年次には「教職入門セミナー」（2 日間の観察実習）、「教職インターンシップ入門」（学習支援）を受講し、3 年次に「教職インターンシップ実践」（TT 等での授業実践）、4 年次に「教育実習」（教壇実習）を設置し、「教職インターンシップ実践」と「教育実習」に関しては、同一学校に配置し、継続した指導が受けられるように依頼している（可能であれば、「教職インターンシップ入門」、「教職インターンシップ実践」、「教育実習」を同一学校で行えるようとしている）。これによって、指導教員が教師志望学生との密な関係を築き、系統的な指導が可能になり、学生の成長段階に応じた指導につながると考えた。また、同じ学校での「教育実習」は、児童生徒の実態を把握しやすく、それを踏まえた教材選択や授業実践が可能になると考えた。

以上のように、本学では教育委員会や学校との連携のもと、協働して実習系科目を実施

**表 2 2015 年度以降の沖縄大学の教育実習系科目**

| 改善した教育実習系科目             | 科目の内容やねらい   |
|-------------------------|---|
| 教職入門セミナー(2年次前期)         | <ul style="list-style-type: none"> <li>・教員の免許取得のための必修科目</li> <li>・講義及び討議・演習等の授業及び観察実習を通して、教師の仕事、役割、責任について理解させ、自らの適性を熟考し教職への意欲を高める。</li> </ul>   |
| 教職インターンシップ入門<br>(2年次通年) | <ul style="list-style-type: none"> <li>・教員の免許取得のための必修科目</li> <li>・毎週1回(水曜)、午前中に学校でのインターンシップ</li> <li>・各教科の授業への指導補助や教材づくり、環境整備、学校行事サポート、支援を要する生徒への学習支援等を通して、体験的な学びを深める。</li> </ul>   |
| 教職インターンシップ実践<br>(3年次通年) | <ul style="list-style-type: none"> <li>・毎週1回(水曜)、午前中に学校でのインターンシップ</li> <li>・担当教員と一緒に共同で授業を実施(T.T)</li> <li>・教科等の教材、教具の協働による作成</li> <li>・一人の教育活動の体験(朝の回、場面指導など)</li> <li>・各教科の授業への指導補助や学級担任との協働による道徳等の授業実践、学校行事等への参加等を通して、実践的指導力の基礎を培う。</li> </ul> |
| 教育実習(4年次)               | <ul style="list-style-type: none"> <li>・通常の教壇実習</li> <li>・本学では、8時間～10時間の授業実践を依頼。</li> <li>・可能な限り、インターンシップを行った学校で実施</li> <li>・教員を目指す上で重要な心構え、問題意識、教員への意欲、責任及び実践的指導力を修得する。</li> <li>・教育実習での省察を通して、教員としての資質能力、態度を形成する。</li> </ul>                    |

している。特に「教職インターンシップ」に実施に際しては、学校現場が学生の受け入れに当たって、「私たちの学校ではインターンシップに来てくれれば、このような指導を行いますよ」というような「受け入れ計画書」を作成し、大学と連携しながら学生の指導が行われており、協働して未来の教師を育てていけるような仕組みが構築されつつある。まだまだ、解決すべき課題もあるが、本学の「教職インターンシップ」は、「授業を観察する」、「学校現場に行く」という「体験」や「ボランティア」だけに終わるのではなく、各実習での課題や内容が次学年度に引き継がれ、系統的に学びを深めていくような「インターンシップ」として機能しつつあると言えよう。

### <引用・参考文献>

Darling-Hammond, L. (2006) Constructing 21st-century teacher education. *Journal of Teacher Education*, 57(3):300–314.

中央教育審議会 (2015) これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～

[http://www.mext.go.jp/component/b\\_menu/shingi/toushin/\\_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896\\_01.pdf](http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/01/13/1365896_01.pdf) (参照日：2016年1月13日)

嘉数健悟・岩田昌太郎 (2010) シンガポールにおける教員養成と現職研修のプログラムについて—NIEでの調査を手がかりに—、*教育学研究ジャーナル* 7: 1-10

(沖縄大学 嘉数健悟)

## 4.2. 沖縄大学の「教職インターンシップ」の実際

### 4.2.1. 「教職インターンシップ入門」について

#### (1) 授業の概要と目的

本学における「教職インターンシップ入門」は、教師を目指す学生が前期・後期を通して学校現場に継続的に関わることによって、教師の指導技術や子どもへの関わり方、教師の仕事の意義や難しさを自らの体験を通して学ぶことを主眼とし、教職を体系的に学ぶ学生にとっては、学校現場を実践的に知るための入門に当たる授業となっている。

教師という視点で学校教育の現場に継続的に参与することによって、児童生徒あるいは集団に対する指導方法及び教職の意義を体験的に学ぶことを目指している。

詳細は以下の通りである。

#### <達成目標>

教師という視点で学校教育の現場に継続的に参与することによって、児童生徒あるいは集団に対する指導方法及び教職の意義を体験的に学ぶ。

#### <受け入れ校とその人数>

- ・受け入れ校 中学校 11 校（那覇市 5 校、浦添市 3 校、豊見城市 2 校、南風原町 1 校）
- ・派遣学生数 47 名（那覇市 25 名、浦添市 12 名、豊見城市 7 名、南風原町 3 名）

#### <「教職インターンシップ入門」の内容>

主に教科指導を除いた教室内外での教育活動に当たる。概ね、次の項目について学校において実施可能な範囲での支援に当たる。

- ・教科等における学習支援
- ・特別な支援を要する児童生徒への支援等

#### <事前指導（4回）>

- ・オリエンテーション、教職インターンシップの考え方と進め方について
- ・教職インターンシップにおける学びとは
- ・「学び続ける教師」を目指して
- ・自分の「目指す教師の姿」とは

#### <中間指導（2回）>

- ・実践状況の中間成果と課題についてのまとめ
- ・実践状況の中間報告会
- ・成果と課題を踏まえた今後の実践計画の作成
- ・終了後の実践報告会の報告書作成計画と発表方法の検討

#### <事後指導（4回）>

- ・個人による成果報告会の資料作成
- ・インターンシップ報告会の報告書作成と役割分担等の会場確認とリハーサル

- ・インターシップ報告会の実施と報告書提出
- ・1年間の教職インターンシップ入門、実践の体験を発表する。

#### <学校現場での実践活動>

- ・学校におけるオリエンテーションー校長等によるインターンシップガイダンスー
- ・実施曜日は、原則水曜日の午前中とする
- ・オリエンテーションを含み、1年間で19回以上の現場実践を行うものとする。但し、19回終了後に継続を要請する学校においては、学生との相談、調整により実施することとする。その場合、学校は保険面等において配慮することとする。

#### <留意事項>

- ・実施期間中は、中間指導として、随時担当教員や連携協力校と実施状況や実施成果等について協議、意見交換を行う。また、大学担当教員は連携協力校と連絡を取り合い、訪問指導も随時実施するものとする。
- ・運動会や校外学習等の学校行事へ終日参観する場合は、2回実施したこととする。また、学生は事前に学校行事等を確認し、参加可能な日程を把握すること。
- ・学校行事または台風等で水曜日が休日になるときは、その代替を学校と調整し、必ず19回以上の現場実践を行うこととする。
- ・不慮の事故又は体調不良で出勤できない場合は、電話等で必ず連絡すること。
- ・出勤したのち、教頭等へのあいさつ出勤簿への押印を必ず行うこと。
- ・担当教諭と日程や活動内容の確認をしっかりと行うこと。

#### (2) 中間指導における学生の振り返りの内容

##### <学んだこと>

- ・自分の当たり前が生徒にとって当たり前ではないのだという事を学んだ。例えば、数学では、自分はこの計算について考えたこともなかったから、教え方もわからない。
- ・教師の後ろから見ただけでも意欲のある生徒や授業に関心がなかったり、集中できていない生徒がある程度見分けられたこと（机や教科書で本を隠して読んでいる生徒など……）
- ・朝のあいさつ運動の時、一人一人に声掛けすることにより、生徒の体調がわかる。毎日、続けていかないとわからない。
- ・言葉だけで指導するより、一緒に体を動かして指導する方がすぐに理解する。
- ・すごいと思った授業でも、反省すべきことがあるということ知って、教師が学び続ける理由の一つをインターンシップを通して学ぶことができた。
- ・「学校」としての教育相談室に対する支援の姿勢や取り組み方、先生たちの協力姿勢。

##### <悩んだこと>

- ・生徒とのコミュニケーションの取り方
- ・生徒への理解をどうしたら深めていけるのか。生徒が疲れていて心配で、寝ている生徒を無理に起こそうと思えない。
- ・生徒同士で教え合っているときにアドバイスはしない方がいいのか。あと少しでできる

という生徒にはアドバイスをしてあげられるけど、全くできない子には何から教えたらいいのか、何をどう教えたらいいのかわからなかつた。

- ・課題を抱えている生徒への対応にとても悩んだ。どのような声掛けが大事なのかわからなくてとまどつた。

### (3) 事後指導における学生の振り返りの内容

#### <学んだこと>

- ・発達障害などの特別な支援を要する生徒への対応を学ぶことができた。
- ・自分から積極的に生徒に話しかけることで、生徒から声をかけてくれるようになる。
- ・生徒の名前を覚えて、名前を呼ぶことでコミュニケーションが取れるようになった。
- ・先生たちと一緒に授業の内容を考える機会があり、とても勉強になった。
- ・自分が授業をやるなら、どのように指導するのかなど、授業の内容を考える機会が多くあつた。
- ・同じ教材でも先生によって授業が違っていたり、同じ先生が同じ授業を違うクラスでやっても雰囲気が変わる。
- ・「実践」の先輩がいることで、アドバイスをもらいながら活動を振り返ることできた。
- ・観察実習でいった学校との雰囲気が違い、生徒の様子も違つた。

#### <改善点や体験したかったこと>

- ・生徒にどのように注意した良いのかわからなかつた。
- ・自分の専門としない教科（例えば、数学や国語など）の支援に配属された際に、適切なアドバイスや支援が出来ているのか不安だった。
- ・自分から進んで仕事をみつけることが出来なかつた。
- ・特別支援のクラスに観察に入った時に、個性が強く教師としての声掛けなどに非常に悩んだ。
- ・色々な教科の授業も見てみたい。

「教職インターンシップ入門」は、「教師を目指す学生が前期・後期を通して学校現場に継続的に関わることによって、教師の指導技術や子どもへの関わり方、教師の仕事の意義や難しさを自らの体験を通して学ぶことを主眼」としている。

前期を終えた中間指導では、多くの学生が「生徒との関わり方」についての悩みを挙げており、生徒理解の難しさを感じていたが、最終的には、生徒とのコミュニケーションが取れるようになったと振り返っている。また、長期にわたって授業を観察することで、現場の先生の指導技術を学んだり、授業について一緒に考える経験をした学生もいた。

このように考えると、「教職インターンシップ入門」は、「教師という視点で学校教育の現場に継続的に参与することによって、児童生徒あるいは集団に対する指導方法及び教職の意義を体験的に学ぶ」ことに繋がっており、学校現場を実践的に知るための入門として機能していると考えられる。

(沖縄大学 嘉数健悟)

#### 4.2.2. 「教職インターンシップ実践」について

##### (1) 受け入れ校における実施計画

- ・受入れ校数：8校（那覇市4校、浦添市1校、豊見城市2校、南風原町1校）
- ・派遣学生数：17名（那覇市7名、浦添市4名、豊見城市3名、南風原町3名）
- ・各学校ともおおむね次のような計画で実施された。

###### ①受け入れ校の支援希望内容

###### ○教科・領域等の学習支援

- ・支援の必要な生徒への基礎的・基本的な事項の指導補助
- ・習熟度別に個別プリントによる指導補助

###### ○朝の挨拶運動や清掃活動への参加・補助活動

###### ○運動会等学校行事や地区陸上競技大会等中体連大会への参加・補佐

###### ○担当学級の朝の会へ参加・補助活動

###### ○家庭学習のチェック及びコメントの記入

###### ○別室登校の生徒への学習支援や相談活動、体験活動等の支援

###### ○特別支援学級の作業学習やスポーツ活動支援

###### ○生徒会活動や部活動等における生徒へのアドバイザー的な指導・支援

###### ○朝のドリル学習の指導補助

###### ○自治会祭り等、郊外体験活動への参加・補助

###### ②学生のキャリアアップのための受入れ校の指導・支援内容

###### ○各教科等の授業への指導補助及び教材・教具・掲示物の制作

###### ○職員朝会、学年会、教科研修会等の参観

###### ○学級担任との協働による道徳・特別活動の授業実践補助

###### ○校長、教頭、研究主任、生徒指導主事等の講話・講座への参加

###### ○問題を抱える生徒や別室登校生徒等、個への関わり方の指導

###### ○総合的な学習の時間におけるキャリア講話の補助

###### ○生徒会主任との協働による生徒の活動づくりの実践

##### (2) 大学における事前・中間・事後指導の概要

###### <事前指導>

###### ・学校派遣前のオリエンテーションの実施

###### ○インターンシップの考え方、進め方及び入門と実践の違い等

###### ○挨拶、服装容疑、時間厳守、言葉遣い、守秘義務、人権等

###### ○自己アピール文、履歴書、日誌の書き方等

###### ○学級経営、生徒指導、教科指導等実践的指導力について

###### ○インターンシップで学びたいこと、調査研究したいことについて

###### <中間指導>

###### ○インターンシップ実践の中間ふり返り報告書提出

###### ○インターンシップ実践で「何を見て、何を体験し、何を学んだか」についての中間報告書提出

- 後期に向けた調査研究計画案の作成・提出
- インターンシップ実践の中間自己評価表の記述・提出

<事後指導>

- インターンシップ実践の最終振り返り報告書提出
- インターンシップ実践で「何を見て、何を体験し、何を学んだか」について最終報告書提出
- インターンシップ実践の最終自己評価表の記述・提出
- インターンシップ実践報告会と報告書作成・提出

(3) ある学生の中間報告と最終報告の振り返り

|   | 中間報告  | 最終報告  |
|---|---|---|
| 楽しかった事  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶運動の時、数名の教師と話をした</li> <li>・特別支援学級に行き一緒に授業に参加した</li> <li>・保健体育の授業を参観した</li> </ul>           | <ul style="list-style-type: none"> <li>・マット運動の授業で技の指導をした</li> <li>・朝の清掃活動の時、一緒に清掃した先生と話をした</li> </ul>                                   |
| 嬉しかった事  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒が自分のことを覚えてくれていた</li> <li>・挨拶をしてくれたり、返してくれた</li> <li>・話しかけてくれた</li> </ul>                  | <ul style="list-style-type: none"> <li>・清掃活動をしていくうちに、落ちているごみの量が減った時（生徒の意識の変化に気づいた時）</li> <li>・生徒から「教えて」と声かけられ、先生として必要とされている時</li> </ul> |
| 辛かった事   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶を返してくれない時</li> <li>・授業中に言うことを聞かない時</li> <li>・授業中に何をすればよいか、どのように注意したらよいのかわからない時</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>・挨拶を返してくれない時</li> <li>・生徒が言うことを聞いてくれない時</li> <li>・関わり方が難しい生徒に直面した時</li> </ul>                    |
| 失敗した事   | <ul style="list-style-type: none"> <li>・生徒と関わる中で生徒と教師の関係を守れず、距離感が近かったこと</li> <li>・予習が足りず、分からぬ問題を教えることができなかつた時</li> </ul>            | <ul style="list-style-type: none"> <li>・注意しようとしてもどう注意してよいかわからず、注意できなかった時</li> <li>・余裕をもって5分前に体育館に行ったら、生徒はすでに整列していた</li> </ul>           |
| 教育実習にどう生かすか   |   |   |
| 教育実習では一つの学級担任になるので、生徒と関わる機会がたくさんあると思う。そのために、距離感が近かった失敗を生かすためにも、インターンシップで生徒との距離感を学び教育実習に生かしたい。 |   | 教育実習では生徒とどう関わればよいかわからないという課題を克服できるよう、授業や学級づくりの中で取り組んでいきたい。特に、いろんな性格を持つ生徒と良い関係が築けるよう、これまでの学びや体験を生かしていきたい。                                |

#### (4) 成果と課題

##### ①成果

- ・観察実習からインターンシップ入門、実践そして教育実習へつなぐ、本学の実習系科目の系統性とそのねらい等について、学校現場の理解・協力が得られるようになってきた。
- ・インターンシップ入門と実践の差別化を図るために、実践においては、学生の指導スキルの向上を目指した直接的な体験等具体的な指導・支援が得られた。
- ・学校の支援依頼に丁寧に対応するとともに、担当教諭等の指導・支援を受けキャリアアップを図ることができた。
- ・「効果的な場づくり」、「評価の観点の捉え直し」、「体育科経営について」、「適応教室生徒への関わり方」等、学生は個別に調査研究課題を設定し、探究学習に取り組むことにより、入門期と違う学びの深まりがあった。
- ・調査研究の結果をパワーポイントやポスターにより発表し、活発な質疑が交わされ、深い学びに向かう姿が見られた。
- ・教職に対する認識が深まり、教師を目指す意志やモチベーションを高め、実践的指導力の基礎を培うことができた。
- ・通年で同一学校において教育活動を観察したり、可能な範囲で教育活動に関わったり、学校の教育課題への対応の在り方等を学ぶことにより、観察力やコミュニケーション力、批判的思考力、企画・運営力等が育まれた。

##### ②課題

- ・教職インターンシップの考え方・進め方についての学校への周知の仕方の工夫。特に、インターンシップ入門と実践の違いについての詳細な説明が必要。
- ・自己の教職への適性や進路変更に伴う科目履修を断念する学生及び当該学校への対応の在り方
- ・年間を通して週1回午前中の活動から、終日2日間の活動日の検討
- ・関係教育委員会や関係学校の教員を招いてのインターンシップ報告会の開催

(沖縄大学 上地幸市)

#### 4.3. 学校現場からみる「教職インターンシップ」

##### 4.3.1. 浦添市立仲西中学校における「教職インターンシップ」の実践

###### (1) インターンシップの受け入れについて

本校は平成28年度、29年度と2年間沖縄大学の「教職インターンシップ」に取り組んでいる。前年度に浦添市の校長連絡会や教頭連絡会の中で、実際に大学側から、インターンシップのねらいや、概要についての説明があった。また、学校訪問を通して、直接本インターンシップにおける達成目標や支援内容等の説明を受けている。受け入れにあたっては、学校側から申し込むという形になっており、それぞれの学校の状況によって、取り入れができるもので、支援内容については、概ね学校現場にゆだねられている。このインターンシップによって、学生にどのような活動を通して、何を身につけさせられるのかは、学校のアイデア一つで変わり、それぞれの学校の特色も出てくるものである。

本校は受け入れるにあたり、管理職が職員会議の中で「将来の教師を育てていくのも学校の役割であること、本校の生徒にとっても学生との出会いが大切であること」などを伝えながら職員への理解を求めたところ、快く受け入れることが決定した。このような協力的な職員体制であることも重要なポイントである。実際に平成29年度は「教職インターンシップ入門」を5名、「教職インターンシップ実践」を4名、計9名の学生を受け入れ、展開することとなった。社会と英語は学生が各1名であったため担当教師を2名ずつ、体育は体育科全体で7名の学生を受け持つこととした。しかし、特別支援、教育相談、生徒指導に関わる窓口は教頭が引き受け、生徒指導主事、教育相談担当、特別支援教育コーディネーターと連携し、教科の指導プラス特別な支援を要する生徒との関わりを作ることとした。

###### (2) 学生の活動時間割について

毎週水曜日に本校で教育活動に関わるということで、他の職員同様、職員IDカードを作成し、オリエンテーションで一人一人に配布した。「チーム仲西中の一員」であることを伝え、自覚と責任について考えてもらうことを意識した。実際に授業観察や指導補助を行う際にも、大学インターンシップのメンバーであることを生徒が理解しており、自己紹介する際に学生もIDカードを見せながら交流する場面が多く見られた。

一度に9名を受け入れたのはよいが、全員で同様の時間割で実践を行うことは無理である。



写真1 浦添市立仲西中学校



写真2 学級活動の研究授業参観

中でも体育科の学生は7名おり、教科に入る時間と支援に入る時間を入門と実践で分けて行うことで、一人一人が両方体験できるよう配慮した。その際、学校が設定してあげるのではなく、学生が自主的に時間割を見て、今日は誰がどの時間割でどう動くかということを自己決定させ、生徒と関わるためにちょうど良い人数を自分たちで配置させた。また、校内で研究授業や体験活動がある場合はインフォメーションし、他教科の体験の応援や、道徳、学級活動などの研究授業を参観する機会を作った。インターンシップの期間で、特別支援学校との交流会や、家庭科の保育実習、特別支援学級における農作業体験など参加できるものを自ら選択させ取り組むこととした。

### (3) 授業観察と指導補助について

毎日の教科の授業においては、体育科と社会科・英語科では、関わり方に差があった。これは学生によるものではなく、教科の特性によるものである。体育科などの実技教科においては、学生が生徒の間を行き来して、指導補助をする場面が多くあるが、社会科や英語科では、観察の時間がほとんどである。グループ活動の際に各グループの話合いの様子に入り生徒と会話をする程度であった。しかし、体育の授業では、実際に生徒と共にプールに入り、個別の指導を行い、陸上や球技などでは自身の経験を踏まえて、実際に指導する場面が多く見られた。このことから、社会科・英語科の学生には、家庭科や技術、美術など技能教科の授業に入ることもすすめてみた。しかし、やはり教科の授業を観察することが実際に勉強になるという意見もあり、「インターンシップ入門」においては、社会科と英語科は授業観察が主となった。社会科においては、担当教師の単元テストの採点の手伝いをすることもあった。

### (4) 教育相談室や特別支援学級での支援

教科の指導と並行して、1日の中で1時間は、特別支援学級の生徒との体験活動や、実際に教室に入れない生徒が登校する教育相談室における学習支援、問題傾向の生徒に対する個別の学習支援など、各自で分担してもらいそれぞれの教室での支援をお願いした。特別支援学級の生徒とは、まず仲良くなるために、学生が生徒の趣味や興味のあるものを題材に書き出すゲームを取り入れるなど、工夫しながらコミュニケーションを図る場面が見られた。



写真3 特別支援学級の生徒と活動の様子



写真4 問題傾向の生徒の個別の学習支援の様子

問題傾向の生徒の個別の学習支援では、長テーブルでは騒いでしまうことから、職員が工夫してパーテーションで学習の場を分けることで、学生が生徒個々の質問に答えながら苦手教科の学習支援を行うことができた。

中でも、学級に入ることができない生徒が登校する相談室の支援では、毎週水曜日に学生が来ることで、1週間の間にやっておくよう宿題を出し、また次の水曜日の登校を促し、宿題をやってきて見せるなど、学生との約束を果たす生徒がみられた。信頼関係をつくりながら、不登校にさせない対応へつながっており、生徒支援の役割を果たしていたと考えられる。

#### (5) 学校行事への参画

今年度、本校は70周年にあたり、地域を巻き込んだ記念イベント「夢実現フェスティバル」が開催された。その第2部で、部活動保護者が運営する屋台と、特別支援学級、教育相談室の生徒が体験学習で栽培・製作した商品を販売する生徒屋台を設置し、販売体験活動を開催した。実際に「ちんすこう」「芋けんぴ」「揚げパン」を作り、当日生徒が来賓や保護者、職員、生徒を対象に販売し見事完売した。最初は学生と一緒に恥ずかしがりながら売り歩いたが、最後は生徒一人でもお客様に声をかけ販売している様子が見られ、1日の中でも生徒の成長を感じられた。



写真5 商品の「ちんすこう」づくりを支援する学生たち



写真6 生徒屋台の様子



写真7 完売の笑顔

#### (6) 「教職インターンシップ実践」の活動

2年目の実践の学生は、今回学校現場に提案する独自の活動を計画しており、教頭にそのための許可願いが出された。

「ステップアップ作戦」と「成長木」の取組である。「ステップアップ作戦」とは、階段の側面に「四字熟語」などを掲示し、上りながら生徒が記憶できるように工夫したものである。殺風景な階段を飾り付ける役割も果たしている。登校した生徒から「階段が変わった」と嬉しそうに報告があった。

「ステップアップ作戦」は、湿度が高い日に粘着テープが剥がれてしまい、現在では残



写真8 四字熟語の中央階段

り少なくなっているが、学生が一生懸命貼っている姿を職員や生徒は見ているため、取れてしまい残念がっている。この取組を生徒会学芸委員会などが引継ぎ、展開できるよう本校でも検討している。

今年度、実践の学生が一番苦労していたのが「成長木」の取組である。これは、毎週生徒にお題を出し、そこから連想される漢字一文字をマジックで記入し、木を完成させるという取組であった。全校生徒に掲示物のみで説明した第1回では、ふさわしくない言葉などをいたずらで書き込む生徒があり、職員から「他の生徒に見せたくないでの剥がしました」との報告が寄せられた。

そこで、お昼の校内放送で活動の趣旨と方法など、協力願いを学生自身が出演し生徒に伝えていた。マジックがなくなったり、一人一文字のルールを守らない生徒がいたりするなど、学生は試行錯誤しながらもあきらめずに取り組んでいた。

一方で、マジックを設置することで校内に落書きが増えることを職員が心配していたため、「失敗を繰り返し学生も学んでいく」ということを職員朝会で教頭から伝えた。

#### 4.3.2. 仲西中学校における「教職インターンシップ」の成果と課題

以上のように、本校におけるインターンシップの取組は、大学で学んでいる理論が、学校現場における実践と少しずつ結びついていくことを学んでいくものであると考える。

教育実習の数週間では体験できないものも数多くある。学生は実際に教師の姿を通して物事を見つめ、生徒との関りを通して喜びや難しさを実感している。日々の学生の日誌からは、毎日生徒の対応でうまくいかなかったと悔しがっている様子、と、生徒との活動での気づきや喜びがつづられていた。



写真9 体育館側の階段を飾った学生

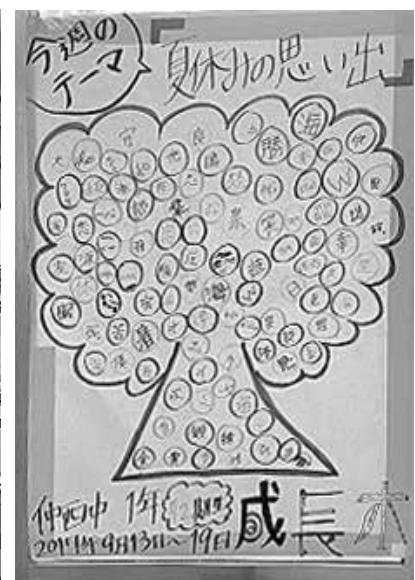


写真10 各フロアに「成長木」を掲示する学生と実際の掲示物



写真11 ヤンチャーズとのお別れの給食

次年度には、「教職インターンシップ入門」、「教職インターンシップ実践」を本校で取り組んだ学生3名が、次年度また教育実習を申し込んでいる。3年目の彼らがどのような授業づくりを行い、活動を展開してくれるか、今から楽しみである。

以上を踏まえ、本校における「教職インターンシップ」の成果と課題を以下にまとめます。

### (1) 成果

- ①各教科の授業支援を行うことで、学生にとっては指導技術を学ぶことにつながり、本校生徒にとって個別に多くの支援を受けることができた。
- ②問題傾向の生徒、特別支援学級の生徒、相談室登校の生徒など、課題を抱える生徒と体験を通して触れ合うことで、多様な生徒の対応について考える機会となり、生徒との信頼関係が築かれた。
- ③不登校生徒の登校が水曜日に増えていたことで、生徒が学生との活動を楽しみにしていたことがうかがえる。
- ④学校行事に向けての取組を通して、生徒の活動の場づくりとしての行事の在り方や教師としての運営の様子を知ることにつながった。

### (2) 課題

- ①受け入れにあたり、担当教師にすべてを任せることが難しい点。
- ②学生によって午後の授業時間割が違い一斉のフィードバックが行えない点。
- ③学生の意欲や態度に差があるため、教師を目指すにあたり一定レベルのモチベーションを持った学生を送ってほしい。
- ④学校と大学が連携した学生の評価について。



写真 12 修了証を校長からもらった学生たち



写真 13 学生たちが作成した全校生徒へのお別れメッセージボード

(浦添市立仲西中学校 仲嶺香代)

#### 4.3.3. 那覇市立松城中学校における「教職インターンシップ」の実践

##### (1) 一日の流れ

2017年度は、5月から4名の学生が以下の活動を行った。

- ①出勤後、生徒玄関前での朝の挨拶運動への参加
- ②職員室へ戻り、教頭先生と本日の授業参観計画を確認
- ③各自分かれて授業へ入る
- ④3校時終了後、控え室で今日のまとめを行い、教頭と顔合わせして終了

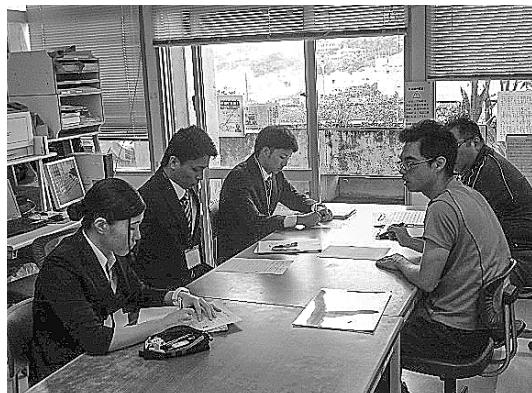


写真 14 年度初めの打ち合わせの様子 (H28 年度)

##### (2) 実際の活動

###### ①水泳の授業での補助

水泳の授業では、記録測定を行ったり、練習の場面においてフォームのアドバイスを行ったりした。

###### ②器械運動の授業での補助

マット運動の授業では、技の練習の時に安全に練習が行えるように補助を行った。



写真 15 水泳の授業風景



写真 16 器械運動の授業

###### ③教室での授業

教室での授業では、授業の進め方を観察しながら、プリント配布の補助や机間指導をしながら生徒への助言を行った。

#### ④その他

##### ア：地区陸上の練習への参加

9月には、地区陸上競技大会に向けた練習に参加し、生徒の指導に当たった。また、大会当日も参加し、選手控え場所において、出場選手のサポートを行った。

##### イ：行事への参加

7月の運動会に参加し、グラウンドのライン引きや散水、片付けなどを積極的に行っていった。



写真 17 大会後のミーティングの様子

##### ウ：部活動への参加

女子バスケット部の練習へ参加し、積極的に生徒と関わる機会を作っていた。

### (3) インターンシップに期待すること

#### ○学校現場の今を知る機会に

インターンシップの取組を行うことは、教師の目線で学校現場を知ることにつながり、次のステップである教育実習へスムーズに入ることができる。また、生徒理解の場でもあり、どのように生徒と接していくべきかを考える機会となる。

### (4) インターンシップの課題

#### ○調整（打ち合わせ）内容の充実

限られた時間の中で、どのタイミングで打ち合わせをするか、その時間の確保が難しい。午後からの実習なら、放課後の時間で話し合いができる。特に、インターンシップ実践では、教材研究を一緒にを行うなどの可能性も出てくるので、時間の確保が必要である。

#### ○保険の充実

実習中に本人がけがをしたり、他人にけがを負わせたり、誤って備品等を破損させた時などの補償体制を充実させる必要がある。

(那覇市立松城中学校 相澤敬二)